

日本交流分析学会第32回学術大会

日時：平成19年6月9日

場所：岡山大学津島キャンパス

病的賭博者75例のエゴグラムの検討

太田健介（札幌太田病院）

【目的】病的賭博患者のエゴグラム（ECL）を分析し、その人格傾向を明らかにする。

【対象と方法】2004年2月 - 2007年2月に当院にて同症と診断された75例について、1．属性、2．ECL各自我状態の得点の統計値、3．症例毎のピークの自我状態を調べ、4．自我構造別に分類した。

【結果】1．男性83％。平均年齢39歳。学歴は大卒29％、高卒27％。就労者が73％、職種は会社員33％、パート等22％、公務員17％。賭博種類はパチンコ・スロットのみ71％、自己破産等あり32％。2．各自我状態の得点が0 - 3を低値群、5 - 8を高値群とした。CPは低値群88％、Aも低値群79％、NPは低値群54％、高値群31％、FCは低値群40％、高値群35％、ACは低値群27％、高値群49％、Fは低値群95％。中央値はCP1、NP3、A2、FC4、AC4、F1、最頻値はCP0、NP1、A0、FC4、AC6、F1。3．ピークの自我状態はACが40例（53％）で最多。FC22例（29％）、NP13例（17％）、A6例（8％）、CP2例（2.7％）。4．自我構造から5群に分類可能であった。第1群はNPとFCが高くCP、A、ACが低いM型の22例。第2群はACが高く、低CP、低AのN型の21例。第3群は右肩上がり型の9例。第4群はピークがAの6例。第5群はその他15例。

【考察】ピークの自我状態がACかFCの症例が全体の8割を占め、8 - 9割が低CP、低Aであることから、同症患者ではチャイルド優位の自我構造で厳しさに欠け、非合理的で感情的な人格傾向が一般的と言える。また、第1群はFC優位、第2群と第3群はAC優位であるが、いずれも低CPであり、基本的構えは、前者では自己肯定的だが自己愛が強く周囲に甘えて責任を取らず、後2者は自己否定他者依存的と言える。